

All Englishで自立した学習者を育てる

外国語 英語 I 第1学年

石川県立内灘高等学校・教諭

1 事例の概要

基礎学力不足から学習への興味や関心が薄い生徒を対象に、All Englishの授業が成り立つのかという不安もあったが、All Englishで自立した学習者を育て、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育てることを目標に、以下のような実践を行った。「確かな学力」には自己教育力が必要であり、生徒自身が考え、気づき、発信できる能力の育成を図ることが大切である。外国語学習では、未知の語彙をどう処理するかなど、学校を卒業してからも必要な力、すなわち国際社会を生きる力が求められる。基礎学力の不足を欠点として捉えるのではなく、生徒が興味や関心を持てる活動から始め、それを考える楽しみにつなげ、教科書の内容や言語材料へとつなぎ、最後は生徒が英語で自己表現したいと思える、自立した学習者を育てようと試みた。

2 実践内容

(1) 単元の目標

スピーチを読み、スピーチの仕方を理解し、スピーチを書く事で自分を表現する能力を高める。

(2) 指導上の工夫点（視点）

① 指導法の工夫

ア ウォームアップ活動の重視

生徒の興味や関心を喚起するため単語ビンゴや洋楽を聴くことなどを学年全体で取り組む。

イ 授業の流れ（指導計画）の工夫

生徒が飽きないようにウォームアップ活動と教科書、言語活動を密接に関連付ける。

ウ 学び方の指導の重視

ノートのとり方を細かく指導し、点検、助言することを英語科の共通目標として掲げている。

② 英語的活動の工夫

ア Direct Methodによる英語で進める英語の授業

挨拶から活動の指示、内容の説明に至るまで、All Englishで行う。

イ 生徒が「楽しい」と思え、「分かりやすい」授業の工夫

単語や文法の導入、言語活動で生徒が楽しいと思えるようクイズ形式や絵コンテを多用する。生徒が理解できなかった単語や文を易しい別の表現で言い換える。（パラフレーズ）

ウ 状況や内容、能力に応じた活動や発表形態の工夫

ペアやグループワーク、ディスカッション等の活動を取り入れ、活動成果を発表する機会が多くなる様にする。

③ 学習定着のための工夫

ア 辞書の引き方、予習や復習の仕方などを指導することで自己学習ができるようにする。

イ 英語が当たり前のように飛び交う環境や英語を通しての関係を作る。英検の全員受験を行う。

ウ ノートやプリントをしっかりと書かせ、点検、返却、助言することでしっかりと復習させる。

④ 評価の工夫

ア 授業中の関心・意欲・態度を積極的に評価し、毎時間集める提出物を点検して評価する。

イ 単元のまとめとしてデジタル絵本を作る活動など、マルチメディアを活用した評価をする。

ウ 生徒が自分の英語学習を振り返り反省や評価をする自己評価をさせ、個別に助言する。

3 指導の実際

学習内容	生徒の学習活動	教師の指導・支援	評価規準(観点・評価方法)
Speech	・プリントで小さい頃の夢、今の夢を考えて書く	・過去形と現在形に注意を促しながら自分の夢について考えさせる	・動詞の過去形、疑問文、否定文について理解してプリントを完成させることができる【表現の能力】
	・プリントを使ってスピーチの下書きを書く	・書きたい内容をどう英語で表現するか指導する	・スピーチの仕方を理解しスピーチをすることができる【表現の能力】

C-1 指導案

4 成果と課題

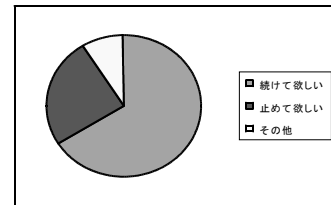
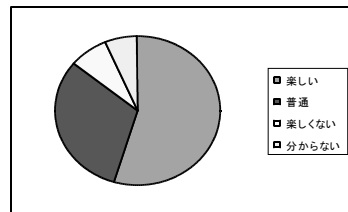
(1) 指導方法の工夫

英語の授業は英語で進めるという信念のもと、英語にふれ、英語を発することが自然な環境づくりができた。入学時と比較した7月では、授業が楽しいと感じた生徒は過半数を超え、1年を経過した本年3月では9割を越える生徒が英語で進める授業を支持している。

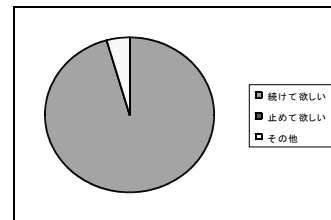
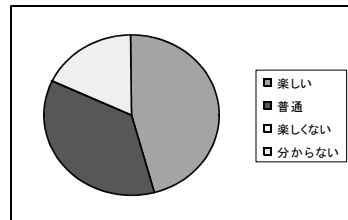
【英語の授業は楽しいですか？】

【英語で進める英語の授業について】

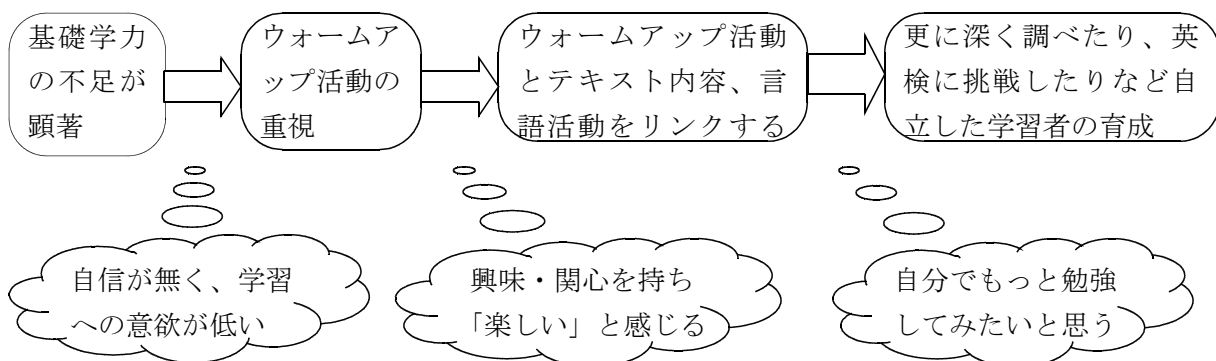
2005年7月



2006年3月



(2) 英語的活動の工夫



入学時は基礎学力の不足で「どうせ勉強しても分からない」と自信のなかった生徒が、今では「こんな授業なら楽しい」と笑顔があふれ、Thank you!やSee you!など単文ではあるが英語を発するようになった。4月第1回目の授業を「始めます」ではなくHello! Everyone! と始め、「日本語で言うて」という生徒にI'm sorry. I can't speak Japanese. と英語で授業をするという信念のもと、コミュニケーション型の授業を目指してきた。しかし、まとまりのある文を聞いて理解できるようになったのに、書く能力となると耳に残っている音を文字化しようとして、appleをappuruと書くなど基本的なスペルを誤る生徒がいるというアンバランスな状況が見られる。今後は、音声を重視したコミュニケーション型の授業をどのようにして読む・書く活動につなげていくかが課題である。